自然遊学館だより

特集号　1994.6.1

市民の森は、人と自然との共生をテーマに市民が自然と対話し、また、自然保護に対する市民意識の向上を図り、市民文化の創造の場として整備されました。

貝塚市には、まだまだ多くの豊かな自然が残っています。自然遊学館では、この恵まれた自然を紹介し、「人と自然との共生」について市民と共に考え、行動していきたいと思っています。

自然遊学館に望む

「生き物学（生物学）、大学に入ってからでは遅すぎる」

これは私の持論です。生命（いのち）の尊厳、環境保全は、幼児期の少年期の生き物との触れ合いから育まれます。

そのままの自然の中で、子供達を思いっきり遊ばせ、土手で雲を、海辺で夕日を……。自然遊学館はそんなことに手を貸していただきたいと願っています。

一度寄せていただきましたが、今度は孫を連れて行きます。　（年とった自然児より）

元大阪府立大学農学部教授

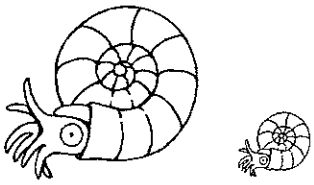
藤下　典之

貝塚市の依頼で、昆虫の生息状況を調査しましたが、海岸からブナ林まで、こんなに多様な自然が残っているところは、大阪でも数少ないでしょう。この貴重な貝塚市の遺産を守っていくために、自然遊学館が力強い基地になり、市民と一体となった活動のセンターになってほしいですね。

自然遊学館を良い施設にするには、まず中で働いている人が、楽しくやれないと望めないことです。その条件作りに、もっともっと時間がかかるでしょう。普通こういう場合、ゼロからの出発とか1からの出発とか言いますが、貝塚市の場合（他の市町村のことはよく知りませんが）、もっとそれ以前のことではないかと思っています。職員が研究や普及に意欲が向くような、条件づくりが望まれます。そのためには、市民や行政をはじめ、多くの方々の応援が欲しいところです。

大阪市立自然史博物館学芸課長

宮武　頼夫



自然遊学館に託す夢

展示も　もっと充実させなければ。見ておしまい、聞いたら何でも分かるというのではね。余韻（よいん）を大事にしたいものです。

近時わが国は経済の上昇期に知識および資料集積型の立派な博物館が各地にできた。これはこれで誠に結構なことである。貝塚の自然遊学館はどう転んでもこれらの博物館の足元にも及ばない。それではどうするか。立派な博物館の演出しにくい人間的ぬくもり、コンパクト性・明解性を求め、機動力を活用することにあると思う。立派な博物館はていねいにみたら半日いや１日でも足りないかも知れない。しかも高遠な学問体系にのっとった内容は一般の人には理解しがたい面が多々あると思う。ことに幼稚園児や小学生にはむずかし過ぎる内容のものが多い。またすべての事柄が理路整然と説明されていると、この世の中には分からないことは無いような錯覚を起こす。

ところが、この遊学館はゆっくり回っても20分もあれば十分である。内容も、貝塚市の“自然”（動・植物、化石など）を海岸から和泉葛城山に至る１４ｋｍを海岸、町、農村、里山、山地の５生態区に分けて説明し、最後にブナ林に到達するという、あくまでも地域に密着した展示よりなっている。また中央には、この館のシンボルであるアンモナイトや地形模型とともに貝塚の四季折々の生きた昆虫が展示されている。つまり、ここにはわずか３０ｍ程の間に貝塚の自然が凝縮されていて、大まかのところが分かるというようになっている。また、特別展示室には世界の珍稀昆虫のコーナーもある。これらに対する説明も単純明解、展示点数も少ないので、始めから終わりまで丁寧に読んでいかれる方が多い。また希望に応じて説明をしたり、質問を受けたまわり、できる限りの解答を示すという、きめ細かな対応もできる。来館者（特に子供）に貝塚の自然を知ることにより関心をもってもらい、さらに未知の世界への好奇心、探究心をもってもらうのがねらいである。

博物館そのものの活動としては、館のスタッフの行う独自の研究のほかに　１）貝塚市の財産である“自然”の要素、動・植物を調査し、実体を把握する。ことに市の中心部を縦に流れる近木川との関連において時間軸の上に立ったデーターの積み重ねが必要である－－葛城山頂にはブナの自然林があり近木川上流では湧水が飲める場所があるというのに、近木川下流ではワースト４というありがたくないレッテルをはられている実状がある。また調査データーは、貝塚市の環境推移の判定および将来的な貝塚市のプロジェクト実施に当たっての指針としても役立つものである。　２）貝塚市民と共に自然との対話の機会を通じ、自然と人間生活との関連を考え、必要に応じその重要性を啓発する。幼少時に自然を友とした人は大人になっても自然への配慮を忘れないが、子供の時代に自然とのつき合いを絶った人は自然の必要性を全く感じなくなり、心に円満さを欠き、破壊的になる。　３）自然学習会などを企画する。これらを通し市民は“自然”から多くのことを学ぶ。即ち観察眼の養成、区別・識別・整理法、不思議さや未知へのチャレンジなどなど。

自然遊学館顧問

黒子　浩

・プロフィール
元府立大学教授：昆虫学
近　著：タイ国における
熱帯果樹のりんし類害虫
日本産蛾類大図鑑　Ⅰ・Ⅱ
（講談社）
他人評：温厚　謙虚
趣　味：謡曲

“市民の森”が森らしくなり、鳥がさえずり、虫が鳴き、木陰ができ……そんな中に建つ遊学館。

生き物好きの子供や大人が遊学館を訪れ、多目的室では、いろいろな催し物や講座が開かれます。職員は行事や講座の準備、採集、研究と多忙です。

かって岸和田の特産品のひとつだったチーゼルは、私がそこに住み始めた（1968年）頃あちこちの畑に植えられ、人目を引く不思議な光景をつくっていました。趣味のグループでチーゼルの名を使ったことから関心をもち、畑を紹介してもらい、仲間が絵や写真に収めました。

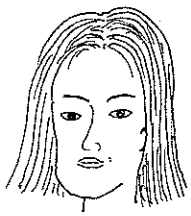
1990年頃、チーゼルのことをもっと詳しく調べようとしたのですが、チーゼル畑は消えていました。長い間生きながらえてきたものが、いとも簡単に消滅することをこの目で見て、ショックを受けました。

同じく1968年頃、貝塚の蕎原を訪れたとき、ササユリが咲いていました。今ササユリに出会うことは難しいようです。「ササユリを見付けたら花びらを１枚ちぎっておくと良い。そうしておくと手折ったり抜かれたりしない。ササユリを守ってやれる。」そんな話を聞きました。実行した方がいいのでしょうか。

何を残して、何は失っても良いのか。人の思いはさまざまでしょうし、立場が変われば考えも異なるのは仕方がないと思うのですが、失った生き物を取り戻す事はできないし、いったん減少しかけた生き物が、あっという間に滅びてしまう例をたくさん見ています。失ってはならないもの、大切にしたいもの、それが何かを知るために遊学館が役に立てばと思います。

自然遊学館職員
白木　江都子

・プロフィール
昔、母校で生物の先生をしていた。大阪市立自然史博物館友の会評議員。農学部そ菜（野菜）研究室でレタスの炭酸ガス施用について研究したことがある。
他人評：明るい　世話好き
趣　味：コーラス



自然遊学館では、貝塚市の自然を紹介することが大きなテーマになっています。現在、私たちの暮らしを考える上で、環境問題を避けて通ることはできません。そして、環境問題で最も重要な問題は自然環境についてです。自然遊学館が貝塚市の自然の紹介を大きなテーマとして掲げている理由は、一人でも多くの人たちに「自然」を理解してもらうことが、環境問題に取り組んで行く上で重要だと考えるからです。

貝塚市の自然を紹介するためには、第１に貝塚市内の自然を詳しく調査する必要があります。第２に広範囲な自然について知らなくてはなりません。貝塚市の自然といっても、貝塚市内で閉じているわけではありません。周辺の自然環境はもとより、地球的規模で影響を及ぼす現象もあります。

一例を揚げてみましょう。いま私たちの家の近くで巣を造り雛を育てているツバメは、フィリピンなどの南の国から渡ってきています。そして、秋になると、また南の国に戻って行きます。ツバメは、雛を育てる餌として、たくさんの昆虫を捕まえます。作物を食い荒らす害虫もたくさん捕まえてくれます。害虫を捕まえるということでツバメは私たちとも影響を及ぼし合う関係にあるわけ

です。もし、私たちがツバメの個体数を減らすような行為をしたなら、減った分のツバメが捕らえてくれていた数だけ害虫が増え、私たちの暮らしに影響を及ぼします。それだけではなく、南の国へ帰るツバメも減るわけですから、南の国の農作物にも影響を及ぼします。

ツバメのように身近でみられる生き物は比較的利害関係が理解しやすいかも知れません。しかし、ツバメ以外にも渡り鳥はたくさんやってきます。その鳥たちが、何気ない気持ちで捨てられた釣り針を飲んで死んでしまうことも少なくないのです。自分では軽い気持ちでしたことが、広い範囲に大きな影響を及ぼすこともあるのです。

さまざまな生き物がどのように暮らしているかを知らなければ、どんな生き物がどのように関わりながら生きているのかわかりません。生物どうしの関係がわからなければ、自然環境を論ずることも、行動することもできません。人為的に増やした動物を放したり、植物を植えたりする事で「自然を回復」しようと試みられることがあります。しかし、それらの生き物が、どのように影響し合うかを考えないで、やみくもに行う行為はかえって自然を破壊する行為ともなります。

ずいぶん散漫になりましたが、ここで、自然遊学館での取り組んでみたいことについてまとめてみると、

1）貝塚市の自然環境について調査・研究を行う

2）貝塚市の自然環境が周辺の地域とどのように関わっているかを調査・研究する

3）調査・研究で得た資料・標本をさまざまな研究に利用できるように保管する。

4）調査・研究で得た資料・標本を、展示や普及行事に活用する

5）友の会のような支援団体を組織し、普及活動などの強化をはかる

です。

しかし、貝塚市内の自然環境についてすら十分には調査できていないのが現状です。さまざまな問題をかかえた施設ですが、いずれは、小さくても博物館としての機能を果たせる「自然遊学館」になることを望んでいます。

自然遊学館職員

中谷　憲一

・プロフィール
水生昆虫とくにアメンボの研究
プロの昆虫写真家
みどりと生き物会議会員
他人評：こまやか・やさしい・正直・生き物に関しては妥協しない
趣　味：たき火

自然遊学館職員

湯浅　幸子

・プロフィール
農学部果樹研究室で温州ミカンの珠心胚の培養研究、いわばバイテクのパイオニア
海外生活７年　まだ海外ぼけが抜けない
他人評：浜美枝に似る歌うような言葉、声
趣　味：洋裁

自然遊学館　TEL.0724-31-8457
貝塚市二色３丁目２６－１
開館時間 午前９時～午後９時
休館日　火曜日